

9. なぜ経済発展のパターンは異なるのか

1. 初期条件・制度・経路依存性
2. 複線的な市場経済の発展

初期条件

- 個人は、真空状態ではなく、具体的な自然、社会・文化環境のなかで、また他者と相互に影響しあいながら、経済行動を行なっている。その結果、市場が効率的な資源の配分をもたらさないこと(市場の失敗＝狭義の「市場のパラドックス」)は多い。かくて、近年の経済学は、伝統的な仮説である個人の「自己利益追求」に加えて、この個人の経済活動に影響を与え、それを拘束さえする外部社会や個人間の相互依存関係を、明示的に取り入れることに努めることになった。
- 経済主体に影響を与える外部社会と個人間の相互依存関係において、もっとも重要なのは、天然資源や自然環境をはじめとした、労働が働きかける外界の物質的世界である。それは、直接的には市場交換とは関係ない。そのなかで市場は営まれるが、それは、そこでの経済主体に、自らの活動とは関係なく、いわば所与として与えられるという意味で、市場の「初期条件」と表現できるであろう。
- 新制度学派は、こうした「初期条件」を「制度」として捉え、その適用範囲を外界の物質的世界を越えて、人間が社会生活のなかで作りに出した組織や理念にまで広げた。それは 政治組織、法、イデオロギー・文化などであるが、これらもすべて交換経済とは関係なく形成された非経済的なものであり、その意味において、外界の物質的世界と同じく「初期条件」と表現することができる。

制度

- 制度は、そのなかで営まれる経済を継続させる枠組みである。「経済」の講義においてヴァラニャックの「労働」に関する議論を紹介した。かれは「活動」と「労働」を区別し、「活動」が「非常にかげ離れているのみならず、ある場合には予想すらしえない行為の連鎖」であるのに対して、「労働」は「できる限り変化の少ない物質的諸条件に従って遂行されるものであり、当事者の課題は前もってその条件を知るところにある」。
- また、かれは「労働」を「活動」と区別する。そして、「労働」の「活動」との違いを、繰り返しの有無に求めた。つまり、活動の繰り返しが「管理された時間」の流れを生みだし、そのなかで活動は制度化され習慣化された労働となるというのである。それゆえに、長い「文明史において労働が活動より優位に立ったのは比較的最近の現象に属する」(同:29)。
- 以上から、ヴァラニャックのいう「労働」が、社会的動物としての人間の集団行為としての活動、つまり「物質的諸条件」のもと、「制度」の枠のなかでなされる経済行動を指していることはあきらかであろう。

経路依存性

- 初期条件によって、特定の地域や国での経済に特徴的な性格が付与され、その経済は制度化されることによって、その経済に特徴的なパターンが確保される。しかし、それだけでは、長期間にわたってそのパターンが継続される保証はない。つまり、経済発展のパターンの継続性や経済発展のスピードをあきらかにするためには、初期条件と制度という二つの概念だけでは十分でない。
- そこで注目されるのが、「経路依存性」という概念である。経路依存性とは、戦略的「経済人」の議論を歴史分析に適用するために導入された概念であり、市場経済の運営は非市場（経済）的制度に多くを依存しているが、こうした制度には慣性、あるいは難しい言葉を使えば自己拘束性があるために、一度実現した制度は変更されにくいとする議論である。

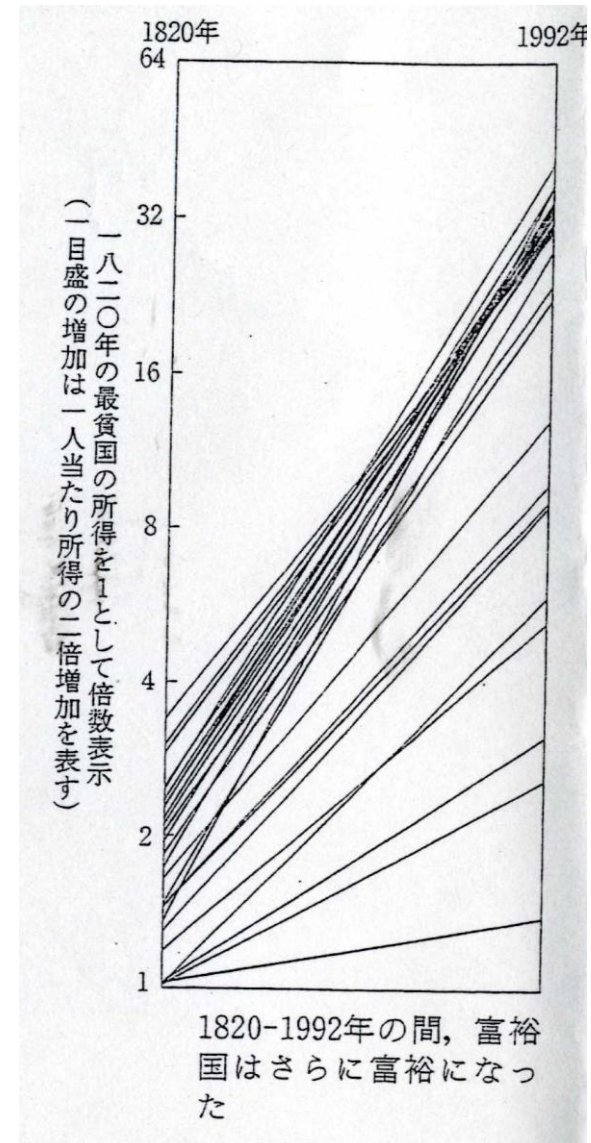
2. 複線的な市場経済の発展 歴史制度分析

- 個人が他者と直接的な関係をもつなかで相互に依存しあう関係の議論でもっとも注目されるのは、合理的「経済人」に代わる**戦略的「経済人」**の概念の導入である。
- つまり、市場において、個人は他者との相互依存のなかで取引を行なっているが、この取引主体間の関係を、個人が自らの意思決定に際して、他者がいかなる意思決定をするかを考慮し、相手がこのように行動してほしいとの期待をもって、戦略的な意思決定の社会的帰結として解明しようというのである。
- この戦略的「経済人」の議論は、近代経済学によって立つ基盤そのものを掘り崩しかねない。そこでは、依然として「経済人」が想定されているが、その戦略的行動によって、かれの合理性そのものが、外部条件に依存することで、不確かなものになっているからである。

- 歴史制度分析は、新制度学派と制度に対する関心を共有するが、その関心を制度の歴史にまで広げた。つまり、新制度学派はある時点での制度の効率性を分析する視角を与えたが、その制度がどのようにして形成され、存続してきたかのメカニズムを分析しえていないというのである。
- そして、そこでの鍵概念が、戦略的「経済人」の導入と非協力ゲームの理論をもとに主張された、**経路依存性**である。経路依存性とは、先に指摘したように、**制度は一度作り出されると、その慣性から変更されにくく、長く存続する**という議論であるが、この考え方を、**その制度が形成されるとき**の外部与件をあらわす**初期条件**の概念と結びつけるとき、**個々の社会は、ほかの社会とは異なる、それ独特の経済発展のパターンをもつ**という議論が生まれてくる。

なぜ、経済発展のパターンとスピードは異なるのか？

- 二つの社会が、ある時点において同程度の経済発展度であったとしても、そのときの初期条件のちよつとした違いと経路依存性によって、この二つの社会は全く異なる経済発展パターンを経験するのみならず、二つの社会における経済発展度の格差は時間とともに拡大していくという議論が可能となる。



歴史の連続と非連続

- 「われわれの試みている社会学は、学問原理よりも現象に、変数よりも出来事に、統計的規則性よりも危機に、焦点を合わせている」。(エドガール・モラン『出来事と危機の社会学』1990:209)
- 「出来事というものは、さまざまな仕方で、かつ決定的に人間の歴史に介入して起こる。自然の大異変や気候の変動、等々のように、社会生活に外圧的な原因に基づく出来事もあれば、侵略や攻撃や戦争のように、考察対象の社会にとって社会的ではあるが外圧的である出来事もあれば、政治的事件や社会的葛藤や危機のように、社会に内在的である出来事もある。したがって、社会的現実のうち均衡のとれたシステムだけを捉えようとしてはならない」。(モラン1990:211)